

読書感想文コンクール入賞作品

最優秀賞

「チーズはどこへ消えた？」 ジョンソン， スペンサー 著

チーズのありかを読んで

電子制御工学科2年 高田 悠月

スペンサー・ジョンソンの『チーズはどこへ消えた?』は、人生における変化への向き合い方を寓話として描いた作品である。この物語には、舞台として「迷路」が登場する。迷路は私たちの人生の象徴であり、その中で誰もが「チーズ」を探して歩いている。チーズは人によって意味が異なり、成功や安心、愛情や健康などといった「幸せの象徴」として描かれる。そしてその迷路の中を歩くのは二匹のネズミと二人の小人（ヘムとホー）である。ネズミたちは本能と単純な行動力でチーズを探し続け、小人たちは人間らしく考えすぎたり恐れたりしながら迷路をさまよう。このシンプルな舞台設定の中で、読者は自分自身の生き方を投影することになる。

登場人物の中でも、最も印象に残ったのは小人のヘムである。ヘムは何度ホーに説得されても頑なに動こうとせず、自分の持論を展開し続ける。その姿は愚かで滑稽に見えた。だが読み進めるうちに、これは私自身の普段の姿でもあるのではないかと気づいた。例えば、イベントのために度入りのコンタクトを作ろうとしたとき、親に「一人で眼科に行きなさい。」と言われた。しかし私は一人で病院に行ったことがなく、不安と恐怖から結局行けなかった。これはまさに、変化を前に立ち止まるヘムの姿であった。読んでいるときは笑っていた存在が、実際の自分と重なった瞬間、胸に刺さった。

一方で、ホーの変化の過程には強く惹かれた。彼も最初はヘムと同じように恐怖を抱いていたが、やがて勇気を持って迷路に踏み出す。恐怖を完全に消したのではなく、抱えながら少しずつ乗り越え、新しいチーズを見つけたときには楽しさに変えていった。その姿を読んだとき、私もこうありたいと思った。ネズミたちのように単純に動くのは難しい。私は考えすぎる性分だからだ。だが、ホーのように「恐怖を抱えつつも行動に移す」ことならできるはずである。以前、友人とほぼ知らない街に無計画に遊びに行った際、新鮮さや楽しさを味わえたのは普段なら得られない体験だった。それは小さいながらも、ホーが迷路に踏み出す感覚に近かったのかもしれない。

この本では「チーズは常にどこかにあり、消えていくもの」と語られる。私にとってのチーズは、画力の向上や友人との時間、資格の合格のような大きなこともあれば、親に買ってもらうアイスのような小さなこともある。つまりチーズはそのときどきで変化する幸せの象徴なのである。だからこそ、「変化を恐れて足を止めるヘム」でいるのではなく、「恐怖を抱えながら歩みを進めるホー」でありたい。実際、私の周りにはネズミたちのように直感的に行動できる人がいて、その姿は主人公のように輝いて見える。私もまた、本当はできるのに恐怖や気遣いを言い訳にして立ち止まっているだけなのだと思う。

私は周りに気を配りすぎて固まってしまうことが多い。本を読み、今後は少しずつでも勇気を持ち、考えすぎずに行動してみたいと思った。迷路を歩くホーのように、新しいチーズを見つける過程を楽しめる自分になりたい。

この作品は短く平易であるにもかかわらず、変化を前にして立ち止まる人間の姿を鋭く映し出す。私と同じように「ヘムみたいだ」と思う人間は多いだろう。だからこそこの本は一度読んでみる価値がある。新しいチーズのありかを知りたいなら、手に取るべき本だ。

「半分論」 村上 信五 著

気持ちが少し楽になる心構え

機械工学科5年 石田 眞子

私は、グループワークで他者に自分の意見を発表することが苦手だ。奈良高専に入学し、五年間が経過しようとしているが「苦手を得意に変える」ことができていない。年々、グループワークの機会は増える一方だが、積極的に考えを発言できない自分に自己嫌悪していた。このような思いを抱いていたときに、本屋に立ち寄ると本書の帯に書かれていた「完璧ではない人間の考え方。論理と理性に柔軟性を取り入れた、不確実な時代を生き抜く新思考術」がふと目に入った。完璧ではない私だからこそその考え方を手に入れたと感じたことが、本書を読むきっかけとなった。

本書は、SUPER EIGHTのメンバー、会社員、NPO活動、編集長など、異色の経歴を持つ村上信五氏が、幅広い分野から得た経験や思考から生まれた「半分論」について筆を執っている。「半分論」は、数多くある選択肢を二つに絞り、その後の決断を二つに選択肢を分けることから、物事を俯瞰することが出来るようになる考え方である。本書は、人生において肩の力をもう少し抜いて毎日を過ごしたい人へ「人生の選択肢を増やす」後押しをする。

私は、本書の「簡単な答えで構いませんので、考えることをやめないでください。」という文を読み、改めてグループワークでの自分自身の行動を振り返る機会となった。グループでものづくりを行う授業では欠かせない話し合いだが、発言する時間になると「私よりみんなの方が良い意見だろう」、「こんな意見を言っても共感してはもらえないだろう」と必ず考えてしまい、自分の意見を犠牲にしてまで他者の意見に賛同してきた。また、自分自身の役割に悩んでいたとしても、他者にどのように助けを求めればよいのかわからず、一人でやりきらなければと背負い込んでいた。

本書を読み進めていくなかで「出来るところまでやりきったなら、全て自分のみで対処せずに残り半分は周りに甘えていいくらいの心構えを作ってみてください。」という文章に出会い、私に足りていなかったことが見つかったように感じた。これまで、自分の出来るところまで全力でやりきっていても最後までやらなければいけないという気持ちが強かった。しかし、この文章を読んだことにより「半分論」ともいえる「割り切り」という意識が足りていないことに気づいた。人には得手不得手があるのだから、得意な一方には全力で取り組み、追求し、苦手な一方は他者に委ねるくらいに考えることが出来れば、少しは気持ちが楽になると改めて気づくことが出来た。

私は、これまで他者の意見を気にしすぎていたように思う。また、役割は全て自分だけでやりきらなければいけないと、なにごとにも一人で背負いすぎていたことに反省した。

これからは、他者の意見に賛同するだけでなく、私らしい意見を他者に伝えることを大切にしていきたい。また、完璧ではない私だからこそその「出来るところまでやりきったなら、全て自分の身で対処せずに残り半分は周りに甘えていいくらいの心構え」を持ち、もう少し肩の力を抜いて、楽しく生きていきたい。

優秀賞

「羊と鋼の森」 宮下 奈都 著

森を目指して ～一人の少年の成長物語～

情報工学科1年 根来 秋帆

「羊と鋼の森」。私はこの本のタイトルを最初に見た時、どんな話なのか全く想像がつかなかった。しかし、あらすじを見て、この本を手にとった。なぜなら、私はピアノに馴染みがあったからである。

ある日の放課後、そのとき教室に残っていたからという理由で、主人公の外村は先生から来客の板鳥というピアノの調律師を体育館に案内するように頼まれた。当時の彼にとって、ピアノも調律という言葉も未知のものだったが、板鳥の調律したピアノの音を聞いて、胸を打たれた。そして、その出来事から、彼は調律師を目指し始めたのだった。高校卒業後は専門学校で調律を学び、その後、無事地元北海道の楽器店に就職した。そして、その楽器店に勤めている個性的な先輩たちの仕事に同行し、個人宅やコンサートホールなどの様々な場所で調律の現場に立ち会い、学んだり、悩んだりする。そうした経験を通じて、彼が一人前の調律師へと成長していく姿が描かれているのが、この「羊と鋼の森」という本だ。外村は先輩たちとは違い、とても平凡だ。もしあの日の放課後に体育館への案内役を任されなければ、板鳥と出会うことも、ピアノに触ることもなかっただろう。ピアノで何か演奏できるわけでも、音楽に詳しいというわけでもない。ただ、「森の匂いや景色が思い浮かぶ音」という自分が目指したい音のイメージがあった。ここに、私も通じるものがある。私は中学生の時、使っていたスマートフォンがネットウイルスに感染しそうになったことがある。私はプログラミングができたわけでも、情報技術の知識があったわけでもなかった。しかし、その出来事をきっかけに、「情報技術の力で多くの人を助けたい」と思うようになった。そして、今まで全く考えたことのなかったセキュリティエンジニアという夢を持つようになったのである。このように、夢というのは、まさに偶然のような出来事から生まれるのだと感じた。現在、私はその夢をかなえるためにも高専に通っている。まだ一年生だが、それでも彼のように悩むことは多々ある。授業についていけなかったり、周りの人よりも実験のスピードが遅れてしまったりするなどだ。自分には才能がないのではないかと不安になる時もある。しかし、この物語の中で板鳥の言った、「焦ってはいけません。こつこつ、こつこつです。」という言葉にとっても励まされた。すぐに結果が出なくても、地道に努力を重ねることが大切なのだと、改めて気づかされた。冒頭に述べたように、私にはピアノを習っていた過去がある。そのため、たまにピアノの調律をするために家に人が来ていたことがあった。当時は、何をやっているのかわからなかったが、そのおかげで私は気持ちよくピアノを弾くことができていたのだと、今になって思う。調律師について今まであまり考えたことはなかったが、この本を読んで調律師の大変さがわかり、あの時の人に感謝したいと思った。さて、最後にこの本のタイトルについて触れたいと思う。本の後ろの方にある解説によると、実は「羊と鋼」はピアノを構成する素材らしい。その素材がある「森」は外村が育った場所であり、そして、彼が目指している音のイメージでもある。この本を読み終えたあとで改めてタイトルの意味を考えると、感慨深い。

これは一人の少年のあたたかい成長物語である。この本を読んだ読者は、私のように、外村の成長する姿に勇気づけられ、自分も頑張ってみようと前向きな気持ちになれるだろう。

「アンネの日記」 アンネ・フランク 著

自分の弱さと闘う難しさ

機械工学科2年 奥村 結衣

国語の授業で習った文章に、戦争の記憶を受け継いでいくためには、出来事を自分が体験したこととして受けとめる必要がある、とありました。私は戦争について学んできたつもりです。でも、どこか自分事として感じられていないところがありました。そこで、戦争を生きた人の気持ちをもっと知ろうと思い、私と年の近い女の子が書いた「アンネの日記」を読みました。

この日記が書かれたのは1940年代で、ドイツのナチス党によりユダヤ人への迫害が行われていました。ドイツで暮らしていたユダヤ人のアンネ・フランク一家は高まる反ユダヤ人感情を危惧し、オランダへ移住します。ですがやがてオランダもドイツに占領され、そこでもユダヤ人迫害が進み、アンネの姉マルゴに労働キャンプへの召集令状が来たことをきっかけに一家は潜伏生活を始めます。

アンネは誕生日に貰った日記帳に、自分の気持ちを打ち明けていきます。家族、将来、自分の性格のこと、共感できることが多くあり、まるで自分の気持ちを読んでいるようでした。しかしそれ以上に、アンネに教えられたことも多いです。

日記の中で、1年前の自分を振り返る場面があります。アンネは過去の日記を読み、どうして自分はこんなに激しい怒りを書かずにはいられなかったのだろうと不思議に思います。私も過去の自分を思い出すことがあります。そんな時過去の自分の考えの浅さに恥ずかしくなり、それ以上考えるのをやめます。しかしアンネは、その時の自分の気持ちを理解しようと努め、その結果自分の欠点に気が付きます。私もそうしなければならなかったのだと後悔しました。自分で自分の成長する機会を奪っていたのです。

特に目を覚まさせられた言葉があります。『自分は弱い性格だ』と言いながら、そのくせ平然としてられるのって、私にはとても考えられません。』私も自分の弱さは十分わかっています。時に私は自分の存在に耐えられません。だから私は強くなりたいと思ってきました。でも、私は本気で弱さと向き合い闘おうとしているのでしょうか。例えば、私は声が小さく、それを直したいと思っています。でも、どうして小さいのか、具体的にどんな練習をすればいいのか、真剣に考えたでしょうか。アンネは、強い人です。自分の欠点と向き合い、それを直そうと努力していました。私は、この本を読んで自分の欠点と真剣に向き合うことに決めました。

私はこの日記からたくさんのことを教えてもらいましたし、勇気も希望ももらいました。こんなに強く、他人の悲しみに寄り添い、将来を楽しみにしていた私の2歳下の女の子が、ユダヤ人だというだけで収容所に送られ、そこで亡くなってしまったという事実を思い出した時、私は悲しくてたまらなくなります。そしてそんな子達は今もいます。私は苦しくてたまりません。「アンネの日記」を読んでからますますつらくなりました。しかし今はそれをどうにかするアイデアも力も何もありません。だから、私は今できることを一生懸命して、人の気持ちに寄り添いたいです。